

『ひびき合える世界』を求めて

—「本当の自分」との出会い—

渡 邊 顯 信

I はじめに —問題の所在—

皆さん今日は。いま学長先生がお話の中で親鸞聖人のお歌「明日ありと思う心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものは」をご紹介くださいましたが、初めてお聞きになった方、いらっしやいますか。ほとんどの方はお聞きになった経験がおありですね。まさしく私どもは、若いあなた方を含めて明日どうなるかわからないのが生命いのちの現実です。平均年齢が七〇歳であれ八〇歳であれ、皆、元気で七〇年、八〇年生ききれると

は限りません。今の親鸞聖人の歌は九歳の時の歌だと言われていますが、この歌は大切な内容を我々に示してくださっていると思います。

本日の講演は、佛教音楽が主題ではありますが、佛教を通して「自分の生命とは何か」を考えることでもあります。私たちは自分自身のことを知っているつもりですが、「本当の自分はこれでいいのだろうか」と思っている方もおられるでしょう。

そういうことを含めてちょっと考える時間を頂戴したいと思っています。

1 生命いのちの実感 — 最近の世相から —

昨年九月一日、アメリカで同時多発テロが発生し、それを根拠にアメリカのアフガンスタンへの報復攻撃が始まりました。そして現在は、パレスチナ、イスラエルの抗争と世の中から「争い」が跡を断ちません。

事件発生のニュースが発表されて三〇分くらい後、ブッシュ大統領が「テロリズムだ」とコメントしていました。私は即座に「テロと断定していいのかな」と疑問に思いました。しかし最近の新聞報道を見ますと、九月一日の事件については、ある程

【ひびき合える世界】を求めて

度の予知ができていたと言われはじめ、アメリカ国内でさえブッシュ大統領に対する若干の疑問も出はじめております。

この記事を見た時、「テロとの戦争だ」と言ったブッシュ発言への疑問が解決した思いがしました。

また二〇世紀から二一世紀に変わる時、コンピュータの機械的な性能問題で全世界が右往左往しましたね。幸いなことに機械の問題は、大きな支障がなくクリアできました。その結果、人間はますます機械に対して全幅の信頼を増やしつつあるように思えます。しかしメール通信を悪用した学生殺人事件等の犯罪も跡を断ちません。機械文明への盲信が、一個人の問題に留まらず、多くの無関係な人々の生命に大きく関わってくる恐ろしさを感じます。

このような問題を私たちは少し考えてみる必要があるのではないかと思います。

数年前、湾岸戦争がありましたね。その時は長期間を待たず終了しましたが、今回のアフガニスタンへの攻撃はいまだに続いています。つい最近も誤爆で何人かの人たちが亡くなっていますね。軍事施設のみならず目標を定めるといながら、誤爆が何

回繰り返されたでしょうか。

あなた方の弟や妹と同じ世代の、そして幼児たちの世代さえも巻き添えになっていきます。このへんの問題に、生命を考えるために大事な、そして不幸にして生命を奪われた方々の無念さを無駄にしないためにも、私たち残された者が考えるべき大きな義務があるのではないでしょうか。

一月二一、二二日にアフガニスタンの救済の問題で国際会議が東京でありました。その時の日本政府代表が元国連の難民問題担当高等弁務官緒方貞子さんでした。緒方さんは「あのテロリズムがなければアフガン問題はこれだけ全世界の人々に注目されたであろうか」と極めて重要な問題を投げかけられました。大きな犠牲があつて初めてアフガン問題が注目された。しかもアメリカ国内の事件でなければ、これほど大きな世論喚起にならなかつたかもしれないという残念な推測すら成り立ちます。アメリカという経済大国であるために、非常に大きな問題になり、アフガニスタンという経済小国であるが故に、無視してしまうという経済中心の図式がもたらす不平等・不平の残念な事実でありましょう。

【ひびき合える世界】を求めて

アフガニスタンの地理的自然環境は特殊で、厳しい山岳地帯が多く農地が少ないようです。そういう自然環境の中で恵まれない経済環境の現状に対して、「私たち日本人には関係ないわ、別の国の問題だわ」と言つて傍観し、軽視してしまえることでしょうか。

同じ頃の一月末から二月始め、モフセン・マフマルバフというイランの映画監督が来日されました。現在世界中で注目されている「カンダハール」という映画を制作した方です。この映画は、多発テロ事件とは全く無関係で、事件発生の半年あまり前に、しかもホームヴィデオカメラで制作された作品です。その目的は、何とか全世界の人々にアフガニスタンの悲惨な現実問題を知ってもらいたいという切実な願いにあったそうです。

NHKの番組でキャスターの国谷裕子さんとの対談がありました。日頃のテレビ画面から、かなり気丈な女性と想像していた国谷さんが、マフマルバフさんの話を聞きながら涙を流していました。それほどの大きな悲しみ、痛みを感じていました。その時にマフマルバフさんは、学校教育の、難民キャンプの学校教育の場面を紹介して

いました。難民キャンプですからパスポートのない子どももいました。その子どもたちが、難民として受け入れられた子どもたちの授業を、すこし離れた場所から見ている。そして、それすらも出来ない別な子どもが、建物の外から中を伺うようにして授業を聞いている、そういう場面が放映されていました。こういう問題を私たちは、人ごとと見過ごしていいのでしょうか。このような現状を理解することも、自分の生命を考えるためにも大切な問題かと思われまます。

もう一つは、皆さんも実際にご経験があるでしょう。七年前の一月一七日、阪神・淡路大震災がありました。ところがその時の思いを今、私どもは十分に記憶の底に留めておりましたでしょうか。忘れていないでしょうか。

と言いますのは、その一年前の一九九四年一月一七日、ロサンゼルスで大地震がありました。かなりの衝撃をもって報道されましたが、それはアメリカの出来事でした。阪神大震災は日本のことです。人間というのは、悲しい存在ですが、自分にかかわる場合必死になりますね。しかし生命ということに関しては、自分がかかわる、かかわらないに関係なく、まずは全ての人々に生命があるという実感を懐くことが人間とし

【ひびき合える世界】を求めて

で大切なことではないでしょうか。

2 宗教とは何だったのか? 「その本質的語義と慣例的語義」

人間の歴史の中で宗教ということが考えられだして、数千年がたちます。本当に宗教が生きていれば、テロリズムの発生は少なくなっていたと思います。しかし残念ながら現実にはテロリズムが頻繁に発生し、最近ではアイルランドや、イスラエル、パレスチナの問題にみられるように、同じ宗教に近い人々同士の中でさえ、手を抹消しようとする姿勢が一向に減らない、そういう思いがあったものだから、ある意味では怒りにも似た悲しみが生じていたものだから、宗教とは何だったのだと、こんな言葉で表現してしまいました。

さて「宗教」の言葉を確認してみましょう。その本質的な語義「宗教」という言葉と「Religion」の違いも見直していただきたいと思えます。

「宗教」という言葉は、本来は「Siddhanta 究極の成就」という意味の佛教用語の翻訳語です。縁起の理法や真実を覚られた人「ブツダ」の教法を受持することであり

ます。

一方「Religion」は、明治以降、充分な検討を加えないまま「宗教」と翻訳されてしまいました。時流として「欧米先進国に追いつけ、追い越せ」を第一義とした時代のことです。各種専門用語も、このような時流の中で翻訳されました。ところで「Religion」の語義解釈に大別して二通りの解釈方法があります。

ひとつは、《接頭辞「Re（再び）」＋語根「√leg（拾う）」》であり、もう一つは《接頭辞「Re（再び）」＋語根「√leg（結ぶ）」》の二通りです。紀元前一世紀のローマの哲学者キケロは前者の語義に解釈し、紀元後三・四世紀頃の神学者ラクタンチウスは後者の語義に理解しました。

慣例的にも「Religion」は、万物の創造主である神の恩寵により救済される「神の啓示 Revelation に基づく救済」ということであり、キリスト教、ユダヤ教などが該当します。

それに対して佛教は、「万物の創造主の啓示による救済」ではなく、「Buddha（目覚め、自覚）の教え」という特質があります。このように両者には、明らかに「啓示

【ひびき合える世界】を求めて

の宗教」と「目覚めの宗教」という大きな相違があります。いづれを選択するかは各自の自由ですが、事実としてこういう違いがあることだけは確認しておいていただきたいと思います。

3 佛教とは何だったのか？

「その本質へのアプローチ（「基本的佛教用語」の確認）」

釈尊が悟りを開かれてから二五〇〇余年といわれています。二五〇〇年の中で佛教の教えは何だったのか。今のテロリズムの問題、アフガンの難民問題も含め、それに対して佛教は何ができたのか。私たちは何ができたのだろうか。宗教とは何だったのかということが私の場合は大きな問題となりました。その問題解決のためにも改めて基本的な佛教用語の確認を試みてみましょう。

(1) 《縁起 pratyā-samutpada, paṭicca-samuppaḍa》

前者は、サンスクリット(梵語)であり、後者は、釈尊が使われておられた言語に

最も近いと言われるパーリ語で、ともに縁起の原語で「すべての事象はいろんな要素に縁よって (pratyā)、生起おこしている (samutpada)」という意味です。

「接頭辞「prati (何々に向かつて)」+動詞「√i (行く go, walk)」+接頭辞「sam (共に)」+接頭辞「ut (上へ)」+動詞「pad (起おこす、保たもつ)」。

皆さんがこの場に集まっておられるのも縁起のルールの中での出来事です。約束ごとや手紙、メールの交換にしても、そうなるご縁という流れの中で関係性が成り立ちます。繰り返しますが、「縁起」とは、すべての事象はその必要な要素が寄り集まって保たれている、生じているという事実のことです。決して「縁起が良い(悪い)」と使われるような価値判断の時だけの形容語句ではないことを再確認しておきましょう。

(2) 《無常 anitya, anicca》

冒頭の「a」は否定の接頭辞で、「nitya」は「常にあるもの、永遠なるもの」という意味です。佛教の理解では、「すべてのものは移り変わるもの」であり、永遠なる

【ひびき合える世界】を求めて

ものは一切ありません。成長することも老化することも、良い状態も悪い状態も、病
気から快復することも悪化することも、元氣だったのに突然亡くなることも、まさし
く無常の事象です。すべてのものは、無常という変化の中に存在しているのです。

(3) 《無明、無知 avidyā, avijjā》

事実に明るく無い、真実を知らない。知識に対して明るくない、つまり「無知」。

「ā」という否定の接頭辞に「vid」(知る、明らかにする)という動詞から出来て
います。皆さんはリグ・ヴェーダという言葉が聞かれたことがありでしょう。ヴ
エーダ veda というのはこの「vid」という動詞の名詞形です。サンスクリットは
「avidyā」パーリ語が「avijjā」、意味は同じです。「迷い、苦しみ」の根元、原因は
「真実(真理)」に暗いこと、それが無明です。

(4) 《真実、真理、諦 satya, sacca》

次ぎの「真実 satya」はどういう意味でしょうか。「sat」は、英語の be 動詞にあた

る動詞「yas」の現在分詞形で、それに状態を限定する接尾辞「ya」がついて出来た言葉です。「あるべき状態」のことであり、「真実、真理」を意味します。

真理と實際が融和した世界を「真実」と表現された方もおられます。佛教の言葉に「如実知見」という表現もあります。実の如くに、あるがままに知り見ること。漢訳して「諦（諦観）」、即ち「あきらかに見極めること」です。この「あきらめる」が、価値判断レヴェルで別の意味に理解され、ギブアップになったわけですが、本来は、事実関係を「明らかに極めること」という意味です。

4 人生にとって音楽とは？

人生と音楽の関係は、無関係と言う観点から観れば無関係に違いないのですが、本当の音楽とは、単に表面的な楽しみのものだけではなく、喜怒哀楽すべてにおいて、人間を慰め癒し、支え励ましてくれるエネルギーを内在しているものであります。「音」と「楽」、「音」とは楽音であれ、騒音・雑音であれ、すべての社会現象の中に存在していますね。いまここでは「本質的、真実のひびき」と理解しましょう。

【ひびき合える世界】を求めて

「楽」には、別に「願う」という意味がありますから、「音楽」は、「真実のひびきを願う世界」ともいえます。私が佛教音楽として申し上げたいのはそのあたりです。音楽は「生きる気力のエネルギーであり、同時に互いに融和させる、希望を持たせる源である。泉である」と表現される方もおられます。そのへんを前提にして、私の感じている佛教音楽とは何かをお話したいと思います。

Ⅱ〈佛教音楽とは〉

1 佛教音楽

先ほども申し上げた「Buddha」という言葉には、大きな意味があります。本来はサンスクリットやパーリ語で、原語がそのまま欧米の言語に使われています。

動詞「Budh(目覚める、気がつく、知る)」に過去受動分詞の語尾「ta」がついて普通名詞の「Buddha」になります。目覚めた状態、目覚めた人。何に目覚め、悟

ったものは何かといえは、「真実、真理 satya」です。「satya」に目覚めたすべての人が「Buddha 佛陀」です。

我々は「ブッタ⇨ゴータマ・ブッタ Gotama-Buddha」と限定しがちですが、真実を見極めて事実の關係性に気づかれたすべての方が Buddha で、決して唯一の絶対者的な「創造主 God」ではありません。

ゴータマ・ブッタの四五年間にわたる教化活動は、昨今のような偏差値重視的教化やエリート育成的教化ではなく、終始相手の能力に応じた教化方法でした。これを待機説法と言いますが、佛教經典が膨大な数量となっている理由の一つです。またゴータマ・ブッタの別号の一つが「Sakya-muni-Buddha 釈迦牟尼佛陀」で、「釈尊 Sakya-muni」は、「Sakya 族出身の聖者」という意味で、釈迦牟尼世尊の略称です。固有名詞を付して「ゴータマ・ブッタ Gotama-Buddha」とも申しますように、本名は、「ゴータマ・シッタールタ Gotama-Siddhartha」と申されます。ゴータマ族のシッタールタ。「Siddhartha」には、「完成した目的、成就した希望」などの意味があります。

【ひびき合える世界】を求めて

ゴータマ・シッタールタについては、皆さんの「聖典」の「歴史篇」に詳しく書かれてありますのでぜひ熟読してみてください。

皆さんにも名前があります。皆さんの誕生を迎えて、ご両親を中心に関係者の方々が一生涯懸命に考えられて名前をつけられた。それが現在の皆さんの名前です。自分の名前に、どういう理由・意味がこめられていたのかを確認することも大切です。

自分にかけられた親たちの願いがわかり、自分の人生への大きなエネルギーになるはずです。

ところで、「シヤカムニ・ブツダ(釈尊) Sakyamuni-Buddha」が歴史上の人物であるという事実が考古学上明確になりましたのは、わずか一世紀前のことです。明治三一(一八九八)年、初めて佛骨が発見されました。それまでは釈尊に関する伝承はありましたが、ご自身の遺骨など具体的に証明できるものがなかった。それが釈尊のお生まれになったカピラ城からわずか一三キロ離れたピプラーワーというところでイギリスのインド駐在官ペツペが一つの塚を発掘中に、偶然一つの舍利壺を発見したことで、歴史的に実証されました。その壺にある刻文が「釈迦族[出身]の Buddha の

舍利云々」と解説され、初めて Buddha ゴータマ・シツダールタの存在が判明したの
でした。わずか一世紀前の考古学のおかげです。勿論それ以前の二五〇〇年来、釈尊
の存在はつねに信じられ、その教えは大切に伝承されてきました。

少々脱線しましたが、本題に戻りましょう。音楽について、ブッダ釈尊ご自身は、
どう考えて居られたのでしょうか、經典に尋ねて見ましょう。

(1) 釈尊と音楽・經典記述事例

レジュメの引用文をご覧ください。パーリ語の原典「長部經典 *Dīgha-nikāya*
xxi」の「帝釈所問經 *Sakka-parha-Suttanta*」の教説です。

「*Sakka* 帝釈天」 「*parha* 問」 「*Suttanta* 經典」。

「パンチャシカが」この様に歌い終わったので、世尊はガンダツバ [音楽神]
の子パンチャシカに次のように言われた。

「パンチャシカよ、いま汝の「弾いたベールヴァ製の黄色いヴィーナの」絃の
音色は、歌の音色と調和し、歌声は絃の音色と調和していた。しかもパンチャシ

【ひびき合える世界】を求めて

カよ、「汝の」その絃の音色は歌の音色に勝らず、歌声は絃の音色に勝ったものではなかった「…云々」。

歌も楽器もどっちもよくマッチした、すばらしい調和ハーモニーであったと經典に書かれています。同じ部分の後半で漢訳では次のように付け加えられています。「長阿含經『第十釈提桓因問經』(大正大藏經一卷六二頁中段)」

「汝の演奏には」悲しみも和らぎも、また哀れさも美しさもとやかさもあり、聴く人の心を感じさせるひびきがあった。実にその演奏には多くの内容があり、時には、欲縛を説き、梵行を説き、沙門を説き、涅槃を説いていた「…云々」。

ここでは、演奏者の心からのひびきがその歌声と楽器を通して、実に多くの内容を含んでいたことを記録しています。最後の部分では「佛教の最終目的である涅槃の世界を演奏していた」と。

先ほど申し上げた「真実のひびき」の世界を教え示してくださった經典の一例で、釈尊の音楽観の典型的な事例でありましょう。レジュメの最後にご紹介しましたが、

ある先生は、「お浄土は音楽の世界ですよ。」と教えていただきました。

(2) 「結集」(釈尊没後の經典編纂會議)

釈尊が亡くなられたのは、紀元前四八〇年頃といわれておりますが、その直後釈尊の教説・直説を何とかして確認し伝えたいという願いのもとで、經典編纂會議が開催されました。その會議を「結集 Sangiti」といいます。

一般的に「結集(けっしゅう)」というと、何等かの意思表示を結束させる時に使われますが、經典編纂會議の場合は「結集(けつじゅう)」と読みます。ところで、結集の原語「Sangiti」の意味は、「sam + √gai (共に歌い合う)」ということですが、「合唱・合奏の姿勢」なのです。「梵英辞典」では「singing together, concert, symphony」と英訳されています。個人行動ではなく、上下関係もなく「共に、一緒に」という内容がその基本姿勢です。いろいろな種類の音が協奏し、協調する交響樂の世界でもあります。

經典編纂會議の場合は、經文の記憶や理解内容に誤解がないだろうかということ

【ひびき合える世界】を求めて

互いに確認しあったわけです。經典は常に「如是我聞一時佛…（私はこのように聞きました、ある時佛陀が…）」という記述形式で始まりますが、「結集 Saṃgati」の基本姿勢そのものであります。

第一回の經典編纂會議は、釈尊が亡くなられた直後、王舎城の七葉窟というところで五〇〇人の佛弟子たちが集まって開催されたと記録されています。その後釈尊入滅一〇〇（一説に一一〇）年後、毘舍離 Vāṣaṭī で開催された第二回結集以降、一九五四年五月から二年後の五六年五月までの間、ビルマの首都ヤンゴンで開催された第六結集まで、それぞれの開催趣旨に基づき、佛典の充実が願われて現在に継承されてきています。

皆さんがデュエットやトリオを組んでボーカルや楽器の合奏演奏をされる場合も同じですが、誰かが自分の音だけを強調すれば、ハーモニーは成り立ちませんね。社会生活も同じことです。音声の大きい人ばかりではありません。声の小さい人も、音声障害で声の出ない人もいます。その人々も一生懸命に意思表示をしたいのです。その意志がありながら、言い切れない人もいるのです。その気持ちやこころのひびきを互

いに感知し合える感性に気づかせてくれる世界が、佛教音楽の世界であり、基本であろうと思います。

2 佛教音楽 その流れ

(1) 概説

釈尊当時のインドにおける宗教音楽の環境や概念は、どのようなものだったでしょうか。紀元前一三世紀頃、アリア人がパンジャーブ地方に進入し、移住するに従いその後のインドが形成されました。紀元前一〇世紀頃にバラモン教が中心になると、その聖典「ヴェーダ」が音楽にも大きな影響を及ぼしてきました。

神々に対する讃歌のリグ・ヴェーダや、一定の旋律に合わせて歌う歌詞を収録したサーマ・ヴェーダ、祭詞を収録したヤジュール・ヴェーダなど韻律・旋律と深い関係がありました。文字文化が不十分な時代のことですから、大切な教義や經文を覚える方法として、リズムとメロディ化させるのが、記憶しやすい最善な方法でした。そういう流れが発展した形で、マハーバーラタ、ラーマヤナという二大叙事詩がインド

【ひびき合える世界】を求めて

精神史や文学史を彩ってきました。

佛教の最盛期は、佛陀が亡くなられた後のことになりますが、マウリア王朝の後半、紀元前二六〇年―二三〇年頃のアショーカ王時代、そしてクシャーナ王朝、紀元後一世紀頃のカニシユカ王時代が、佛教の最盛期でした。最盛期の遺跡が、サンチーとかガンダーラ、アジャンター、エローラに彫刻や絵画として残されています。その主題は、ほとんどが釈尊の生涯を記録した經典「ジャータカ」から採られ、絵画や彫刻の上に残されてきました。その中には楽器を持った菩薩、比丘尼たちが登場してきます。

パンチャシカのようなことが釈尊の後もずっとあったという事実ですね。

インドにイスラム教が浸透するようになり、佛教は駆逐されていきますが、ヒンドゥ教ではいろんな神様の一人としてゴータマ・ブツダを取り入れています。いずれにせよ、二一世紀の現在、佛教国として知られるのは、南伝佛教の国としてスリランカやビルマ、現在のミャンマー、タイなどが、そして北伝佛教の経由したチベット、中国、韓国、日本であることはご存知の通りですね。

【インド、スリランカ】

スリランカの場合、最初期の佛教の一部派と言われる「上座部佛教〔Theravada〕」が伝承されていますが、パーリ語の經典で伝えられて来ました。全世界の佛教徒が、共通に大切にしている一つが、資料で紹介した『三帰依〔Ti-sarana〕』です。

先ほど学長が朗誦されたのはその邦訳の詳細な内容です。本来は皆さんも一緒に唱和なさるのが三帰依文の本旨です。覚えていなければ聖典を見ながらも、一緒に唱和なされるのが三帰依文のあり方です。

〔1〕 『三帰依文〔Ti-sarana〕』

Buddham saraṇam gacchāmi, 私は佛に帰依いたします、

Dhammam saraṇam gacchāmi, 私は法に帰依いたします、

Sangham saraṇam gacchāmi. 私は僧に帰依いたします。

このパーリ語の意味は、佛教徒にとり基本的な姿勢を示すものですので、少し説明

【ひびき合える世界】を求めて

させて頂きます。お気づきの通り、三行中、各行の最初の単語だけが異なり、それ以外は、全く同じですね。最初の言葉、「Buddha 佛陀（真理を自覚された人）」、「Dhamma 佛陀の教法」、「Sangha 僧伽（集まり・グループ）」の三つだけ覚えれば後は同じです。次ぎの二語は、「sarana 帰依所（拠り所、安らげる場所）」として、「gacchami 私は生活して行きます」という意味です。特に注意願いたいのは、最後の「gacchami」の「-mi」という語尾です。これは一人称単数現在形の語尾で「私は」を表わします。

「他人の問題」ではなく、「私自身の意志確認（自覚）」の表明なのです。「佛教が自覚の宗教」であることがこの言葉によっても、更にはつきりしますね。

以上をまとめますと、「私は Buddha を拠り所として生活していきます。私は Buddha の教えを生活の拠り所にして歩んでまいります。私は Buddha の教えを中心に集まっているサンガ僧伽を拠り所としてまいります」という内容です。本来は個々人の意思表示の内容がそのまま全体の意思表示になります。ユニゾンというアンサンブルです。ユニゾンというハーモニーができます。お導師一人がではなく全員が一つにな

って初めてグループ「サンガ僧伽」が成り立ちます。

皆さんは、それぞれバラバラな背景をもってここにおられる。バラバラなだけでなく、光華女子学園の教育方針という一つの目標を中心に集まっておられる。この場も「三帰依文実践の一つの場」とも理解できますね。このパリー語のメロディーは、基本的に万国共通のようです。

【2】 『法句經 Dhammapada 5』

Na hi verena verāni sammant'īdha kudaccanam,

averena ca sammantī, esa dhammo sanantano.

実にこの世では、怨みによつては怨みは決して消える（しずまる）ことはなく、
怨みより離れてこそ消える、これが永遠の真実「教法・基本」である。

この偈文をご存知の方も居られるでしょう。佛教精神を表明する典型的な偈文の一つですが、実践の難しさを伴う内容です。

【ひびき合える世界】を求めて

昭和二六（一九五一）年九月、サンフランシスコで太平洋戦争終結の対日講和会議が開催されました。その時、後のスリランカ大統領になられたジャヤワルデネ Jayawardene さんが、この偈文を引用して「スリランカは、日本に対する賠償請求権を放棄する」と演説され、列席の各国代表者に深い感銘を与えました。同じ佛教国の立場から、当時の日本の国情を知ってくださったのでしょうか。

このスリランカの賠償請求権放棄発言は、スリランカの人々には有名な演説のようですが、残念ながら肝心の日本人の方では、忘れられているようです。不幸にして皆さんは、戦後の教育方針により、学ぶことがなかったかも知れませんね。

【東南アジア（タイ・ビルマを含む）】

東南アジアには、Boro Budur や Angkor Vat 等の遺跡があります。ジャワ島クドー平原の森林の中に埋もれていたシャイレンドラ王朝最盛期（八〜九世紀中頃）の創建である Boro Budur は一八一四年に発見されています。カンボジアでは、アンコール王朝中頃のスールヤヴァルマン二世創建（一二世紀前半）の寺院遺跡などが有

名ですが、これらの遺跡によっても、いろんな楽器が使用されていたことが知られています。

一一世紀以降、イスラム文化が隆盛になるに従い、当時の佛教遺跡は破壊され、衰退して行きました。

【チベット】

一方、北方に伝播された佛教は、地理的にも秘境であったチベットに伝えられました。その分、インドや東南アジアと異なり独特の音楽が残されています。チベット佛教の特色のひとつにラマ教があります。ボン教と佛教がミックスした一つの特別な宗教形態ですが、音楽性が重大視されています。ジャンドウンという長い笛を使って勤行を荘厳しています。お勤めの音程は上下の動きも少なく一定に近い勤行に特徴があります。人間の声には低音も高音もありますが、チベットの勤行は特に低音が通奏低音となつているのが特徴です。コントラバスがずっと鳴っているようなもので、その響きの上に倍音が発生して見事な効果となります。そういうものがラマ教のお勤めの

【ひびき合える世界】を求めて

中に伝統的に継承されてきております。

【中央アジア】

中央アジアには、三世紀頃ガンダーラを経由して伝わりましたが、この場合も佛教美術と重なって、ガンダーラ系やトカラ系の佛教美術が華ひらきました。現在、不幸にしてアメリカからテロリストの拠点とされ、激しい空爆を受けているアフガニスタンでは、バミヤンの大佛が有名ですが、それ以外に端正で穏やかな表情をした佛像が多く造られていました。それぞれの民族、文化には違いがありますが、その基本には佛教精神が流れています。最盛期のクチャやサマルカンド、カシユガル、トルファンを通していろいろな楽器が使用され佛教儀式を荘厳していたようです。

【中国(朝鮮・韓国は省略)】

中国には、前漢一世紀頃に伝来され、特に大乘佛教が儒教や道教に並ぶ勢いで広く伝わりました。中国では生天思想を持つ儒教、道教が広がっていましたから、特に極

樂世界を唱導する浄土教の思想は、容易に受け入れられたようです。南北朝、隋、唐の時代には国家的な規模の佛教儀礼が確立し、唐時代には全世界の中で最も音楽文化の進んだ国といわれるほどだったようです。

(2) 声明【日本】

レジュメに書いた通り、インドの学問体系の基本的分類法を「五明 Pañca-vidya-sthana」といいますが、「声明」は、文字通りサンスクリット「Sabda-vidya」の翻訳です。「Sabda」が「声、音声」、「vidya」が「明」です。先ほどの「vid（知る、明らかにする）」の名詞形です。

五明 (Pañca-vidya-sthana (インドの学問体系に関する分類法))。

- 1 声明 Sabda-vidya 言語、文字音韻、文法に関する学問。
- 2 因明 Hetu-vidya 論理学、真理証明に関する学問。
- 3 内明 Adhyatma-vidya 自宗の教理、特に佛教の真理に関する学問。
- 4 医方明 Cikitsa-vidya 医術(医学・薬学等)に関する学問。

【ひびき合える世界】を求めて

5 工巧明 *Silpa-karma-shana-vidya* 工芸、芸能、曆数等に関する学問。

「声明」は、言語学や文字音韻学、文法学もその内容としますが、すべての学問の基本ですので最初に配置されています。

ところで、佛教伝来以降、学問が中心の時代は大きな問題ではなかったのですが、法要など儀式の執行が重視されだしますと、当然のこととしてその具体的執行内容や執行者の資格、そして經典読誦の方法なども問題になってきます。

天平勝宝四（七五二）年、東大寺大佛開眼供養法要が営まれた時、一万八百五十人の列席僧侶名が記録されていますが、日本には法要の導師を担当できる正式な資格者や受戒僧はいませんでした。そこで天平八（七三六）年、第九回遣唐使の帰国と一緒に来朝していたインドのバラモン僧ボーティセーナ *Bodhisena* 菩提僊那を導師に迎え、法要儀式が営まれた事実がありました。

「和讃」もなかった当初ですから、インドの「梵唄、梵語讚」や「漢語讚」が中心だったでしょう。平安時代以降は、佛教儀式の整備に伴い「梵唄」に替わり「声明」

の語が使用されるようになりました。その後、天台声明や真言声明のように各宗派でそれぞれの特徴を伝承しながら、現代に継承されて来ています。

(3) 近・現代のあゆみ

明治時代の文明開化の潮流は政治・思想界が中心でしたが、それを縁として一部の声明の世界にも顕著な変化が現れました。明治一二(一八七九)年、文部省に音楽取調掛が設置されました。後に東京音楽学校や東京芸術大学に発展して行きました。

この設置は、欧米諸国の音楽の流入による旧来の伝統音楽の世界に生じた混乱や動揺を整理し、西洋音楽の手法を通じた日本音楽の伝承と発展を整理するためでした。

キリスト教会の日曜学校を中心とした児童教育活動、特に「賛美歌」による教化活動に刺激されたことも事実です。

明治二三(一八九〇)年、従来の旋律を使った佛教唱歌「法の深山」が発表され流行しました。越天楽のメロディーによる替え歌です。幼児や児童を対象にした佛教唱歌とか佛教童謡という名称も使われ、まさしく明治時代は佛教音楽の草創期でした。

【ひびき合える世界】を求めて

大正時代になりますと、佛教音楽の世界も成長期をむかえ、名称も佛教讃歌とか讃
佛歌の言葉が頻繁に使われだしました。当時の作曲家としては、大正四（一九一五）
年「サンブツ歌」を出版してその歌唱指導に尽力した野村成仁を始め、生涯に六〇曲
余の佛教関係の作品を残した山田耕柝やその弟子にあたる澤康雄などがあげられます。
澤康雄には大正七（一九一八）年作曲の「恩徳讃」が有名ですが、このような先駆
者たちの活躍により佛教音楽は更に発展し、次代に継承されました。

昭和になりますと、特に一〇年代は、佛教音楽の時代と言ってもいいほど、国をあ
げでの創作発表が次に述べるような内容で続けられました。

特に昭和三（一九二八）年、文部省宗教局の中に佛教音楽協会が設置され、以後毎
年佛教讃歌の歌詞を公募し、作曲を依頼して、多くの作品が創作発表されました。後
にも紹介しますが、第一回目の昭和四（一九二九）年四月三日、「花祭の歌」と「朝
の歌」の二曲が発表されています。昭和一五（一九四〇）年まで続き、合計一回の
創作発表で一七三曲の佛教讃歌が文部省宗教局から出版されました。しかし残念なこ
とに、昭和一六（一九四一）年、太平洋戦争勃発という時代の流れのためにストップ

してしまいました。

（4） 戦後のあゆみ

昭和二〇（一九四五）年八月一五日、六千万人もの尊い生命を犠牲にして、悲惨な第二次世界大戦が終結しました。日本の社会は初めての敗戦で、絶望的なほど根底から混乱の極みにありました。昭和二二年三月、東本願寺のご門主 大谷光暢・智子ご夫妻は、戦後の混乱している社会状況を何とか音楽で復興したいと願われ、大谷樂苑を創設されました。昭和二二年から二三年にかけて歌詞を公募し、讃仰歌として二三年六月に大阪で一〇曲の作品を発表されました。ちなみに、大谷智子お裏方は、皆さんもご承知の通り、光華女子学園の創設発意者のお一人で、先ほど唱和された光華女子学園歌の作詞者で、名誉総裁でいらっしやいました。

同じ昭和二二年冬、真宗大谷派内の音楽家（権藤円立・清水 脩・岩崎成章等）が中心になって「日本宗教音楽協会」が発足しました。伝統の宗教を生かしながら現代音楽と組んだ新たな佛教音楽をつくるという趣旨の下に、昭和二三年四月、山田耕柝

【ひびき合える世界】を求めて

作曲「梵音響流」、清水 脩作曲「交声曲 蓮如」をメインに東京の日比谷公会堂で、翌五月には東本願寺と大阪の朝日会館で連日の演奏会を開催して、「佛教音楽の進むべき道に大きな反響を与えた」という評価を得ています。

昭和二八（一九五三）年には、京都女子大・光華女子短大女声合唱団、龍谷大学・大谷大学男声合唱団の四大学で、京都学生佛教音楽研究会が組織され、若者なりに一〇余年の活動を継承したことでした。昭和三六（一九六一）年の親鸞聖人七〇〇回御遠忌を契機に、佛教音楽研究所（本願寺派本願寺）再発足や大谷派合唱連盟の発足もありました。特筆すべきことは、唯一の東西両本願寺共催の記念演奏会が京都会館第一ホールで開催されたことです。記念委嘱作品は「交声曲 歎異抄」でした。

その後、地味ではありますが、各宗派の関係機関が中心になりそれぞれの活動が続けられています。

Ⅲ 〈佛教音楽そのひびき〉〔テープ演奏〕

―心にひびき伝わるもの(真実の生命との出遇い)―

それではこれまでにご紹介した佛教音楽の中から具体的な作品を聴いていただきましょう。本来ならば合唱団などの生演奏でお聴き願うのがベターですが、今回は不可能ですので用意して参りましたテープで、数曲お聴きいただきます。まず初めに、昭和七年(一九三二)発表された作品で、幼児や年少の子供を対象にした作品です。演奏は、ボニージャックスのお力をお借りして、東京の下町荒川にある少年少女合唱隊が演奏しています。

ほとけさま 山田 静 作詞 小松 耕輔 作曲

一 のんの ののさま 佛さま わたしの好きな 母さまの
お胸のように やんわりと 抱かれてみたい 佛さま

【ひびき合える世界】を求めて

ほほえましい親子の情景が浮かんでくる内容のやさしい覚えやすい歌ですね。

日本が軍国主義に巻き込まれた時代作品ですが、文部省で作られた作品の一つです。先ほど少し触れました通り、昭和三年、文部省内に設置された佛教音楽協会が毎年、佛教讃歌の創作発表をしております。ここにお見せしている楽譜には、『佛教聖歌第一回発表曲』と書いてあります。このときの当選作品は、「花祭の歌」と「朝の歌」の二曲で、現在も歌われている作品です。それではこの中の「朝の歌」をソプラノソロで聴いていただきます。

二 のんの ののさま 佛さま わたしの好きな 父さまの

お手々のように しつかりと すがってみたい 佛さま

三 のんの ののさま 佛さま みあかしあげて おがむとき

お姿見えて きらきらと 後光のひかる 佛さま

朝の歌 杉崎 大愚 作詞 末廣 恭雄 作曲

- | | |
|---|--|
| 一 | 朝 <small>あさ</small> な 朝 <small>あさ</small> なに
佛 <small>ぶつ</small> 教 <small>けう</small> 仰 <small>あお</small> ぎ |
| 二 | 朝 <small>あさ</small> な 朝 <small>あさ</small> なに
佛 <small>み</small> 行 <small>ぎやう</small> を慕 <small>した</small> い |
| 三 | 朝 <small>あさ</small> な 朝 <small>あさ</small> なに
佛 <small>み</small> 證 <small>ぎやう</small> 讚 <small>た</small> え |
| 四 | 慈 <small>めい</small> 恩 <small>くみ</small> あふるる
貴 <small>かう</small> き一日 <small>ひとひ</small> |
- 浄きよき 意こころを
浄きよき 思おもいを
浄きよき 意こころを
今日きょうも捧たもげん
我等われらの生命いのち

簡潔ではありませんが、二句目に、「教、行、證」の大切な教理が織り込まれた格調たかい歌詞が、作曲家の平易なメロディーで、しかもわずか八小節の短い混声四部合唱曲として発表され、好評でした。

ここに紹介する二冊目のこの楽譜は、第二回目の昭和五(一九三〇)年、同じく

【ひびき合える世界】を求めて

文部省宗教局内佛教音楽協会刊行本で、「佛教青年会の歌」等一曲が収録されています。その後この佛教音楽協会の公的活動が、昭和一六年の太平洋戦争勃発という潮流のために、ストップしたことや、戦後の状況も、先ほどふれました。

次に、戦後、復興への願いを込めて創設された大谷樂苑の第一回讃仰歌発表曲一〇曲中、第七番の作品「ほとけさまは」を聴いていただきましょう。この作品は家庭の状況を歌いあげたものです。昔の日本は、核家族ではなく、おじいさん、おばあさんも一緒に生活でした。そういう家庭の状況を歌った作品です。

ほとけさまは 森山 美苗 作詞 弘田龍太郎 作曲(大谷樂苑選定)

一 ほとけさまは どこにいらつしゃる

春は 花咲く 枝のもと ララ

夏は 水辺の 草のかげ ララ

秋は 空ゆく 雲の上 ララ

冬は 窓うつ 雪の中 ララララ

いつもどこかで 見ていてくださる

いつも何かを 教えて くださる

ほとけさまは あれあれ あそこに いらっしやる

二
ほとけさまは どこにいらっしやる

お眉 ま白な おじいさまララ

お目々やさしい おばあさま ララ

お胸 豊かな お父さま ララ

お手々清らかな お母さま ララララ

昼でも夜でも 守ってくださいる

いつもあなたを 支えてくださる

ほとけさまは あなたの おそばに いらっしやる

おじいさん、おばあさんと一緒に暮らしている方、小さい頃いらっしやった方もあ

【ひびき合える世界】を求めて

ると思います。おじいさん、おばあさんがお佛壇に向かって拜んでおられるのをご覧になったことがおありでしょう。日本の伝統的な家庭の状況を歌ったものです。昭和二三年、社会が安定していませんが、このような明るい曲もつくられました。最後に「讃仰歌」からその第一番目「みほとけは」です。皆さんの聖典の中にも載っていますように、昭和の名曲に数えあげられる作品で、宗派を超えた味わい深い作品です。

みほとけは 仲野 良一 作詞 信時 潔 作曲(大谷樂苑選定)

一 みほとけは まなことじて み名よべば

さやかにいます わがまえに さやかにいます わがまえに

二 みほとけは ひとりなげきて み名よべば

笑みてぞいます わが胸に 笑みてぞいます わが胸に

三 みほとけは 慕いまつりて み名よべば

包んでいます　　わがいのち　　包んでいます　　わがいのち

この作曲者は「光華女子学園の歌」をつくられた信時潔さんで、敬虔なクリスチャンの方です。山田耕柝氏と一歳違いで、ドイツに留学され、大正二二（一九二三）年帰国しました。その頃「海ゆかば」というとても素晴らしい荘厳な作品を書かれました。

しかし、名曲であったがゆえに戦時中、戦意高揚のために頻繁に使われました。そのため、残念ながら昭和二〇年以降は、軍歌という評価を受けてしまいました。戦意を鼓舞する軍艦マーチのような作品ではありません。実際には大正デモクラシーの中でつくられた作品でしたが、戦後の評価に対して信時先生は一切抗弁なさらなかった。自分の作品を聴いて若い人々、皆さんと同世代の若者たちが戦場に発って行き、多くの人々が特攻隊などで生命を失われました。遺骨となった戦死者をお迎えする時や、葬儀のおり、この作品は鎮魂歌、レクイエムとして、荘厳な思いを込めて頻繁に演奏されたのです。この若者たちが戦死した事実に対して信時先生は、ご自分の責任を

【ひびき合える世界】を求めて

痛感されて、戦後は筆を折っておられました。この敬虔なクリスチャンの方が、このような厳しい苦しい精神状況の中で、昭和二十二年、ご縁があつてこの「みほとけは」の詞に出遇われ、作曲されたのでした。

皆さんの中でご家族や非常に親しい方と死別された方もいらっしゃるでしょう。その方のご命日や思い出される時、この冒頭の主語「みほとけは」を、亡くなった方のお名前に置き換えてみてください。置き換えて歌われますと、この作品の深さを通して、生命の大切さがよく理解されるはずです。そういう深さを教えてくれるのが佛教音楽であります。

Ⅳ 〈むすび…佛教音楽その目的〉

—「本当の自分」との出遇い—

短い文章ですが、レジュメに教言として何人かの言葉を引用しておきました。

先程のアフガニスタンの話に戻りますが、緒方さんの文章にこういうのがあります。「二〇〇〇年九月、私はアフガニスタンへ行つた。それは忘れられた国だった。難

民への援助は年々減っていった。九月一日のテロ行為がなければ、アフガニスタンはあのままだったのではないか」。

テロがなければ、世界の人々はアフガニスタンに目を向けもしなかったのではないか。今、内戦が終わって暫定政権ができています。カルザイ議長がこう言っています。

「私たちは今朝もおいしく朝食を食べた。しかしアフガンにはろくに食べられず、子どもを学校に通わせられない人が何百人もいる。アフガンは戦争、貧困、略奪で破壊し尽くされた」。いずれにしてもテロがなければ国際社会はアフガニスタンの悲惨をほおっておいたのではないかということです。

端的な事例として食料問題が挙げられます。残念ながら現在の多くの日本人は好き嫌いでものを平気で捨てていませんか。口にしたいくてもその食べ物を手にできない人々が、大勢いる。科学技術の進んだこの二一世紀を、同じ時間を共有しているにもかかわらず、飢餓状態の瘦せ細った子どもたちが報道されていますね。

アフガニスタンの地理的自然環境は特殊で、山とか谷ばかりで農地が少ないようです。そのため農作物をはじめ、国産物はほとんどないようです。彼らができる数少な

【ひびき合える世界】を求めて

い収入源の一つが、阿片をつくることだそうです。しかしこの阿片は自分たち生産者が使っているのではなく、他の世界の国々で消費されているという事実が忘れられているのです。自分たちが苦勞して作った阿片が安い金額で買い叩かれ、高い金額で世界中に売られ使われているのが現実だそうです。

麻薬撲滅のためには、アフガンの阿片生産を中止させればいいと簡単に言うけれども、それはある面ではアフガンの経済生活を根底から覆すことだという見方をする方もあります。もちろん麻薬はよくありません。世界中がアフガニスタンをそういう国にしてしまつてはいないだろうか。「爆弾よりも食べ物、地雷よりも安心して生活できる自分たちの土地がほしい」。この現実問題を世界中に理解せしめることが「カダハール」という映画の目的であり、結論であります。

そういう意味において私たちはもう少し自分たちの周囲の状況に驚いてもいいんじゃないか。瞬時だけではなく驚きを持続してもいいのではないか。そして驚きをさらに自分たちで何かの形で表す。ものを大切にするだけで大きな違いですね。そうすることによって自分たちの生命というものを見直す機会ができるのではないか。

ある発表によりますと、全世界の人口は六〇億人だそうです。それぞれが六〇億分の一人という事実に入った力関係から、また先進国・後進国という尺度から、往々にして弱小国や社会的弱者を軽んじ無視する傾向があります。しかし六〇億分の一人が、紛れもない「私自身」なのですね。

大正時代の詩人金子みすずさんは、その詩の一節に、「みんな違って みんないい」と詠っています。さらに「大漁」という詩の後半では、いわしの大漁に喜び湧き立っている人間社会の裏面にある他の生命の境遇や悲しみを見事に詠いあげています。

朝焼小焼だ 大漁だ

大羽鰻の 大漁だ

濱は祭りの やうだけど

海のなかでは 何萬の

いわしのともらひ するだろう

地球上の生きとし生けるものすべての生命いのちの痛みとその大切さを指摘しています。

【ひびき合える世界】を求めて

私たち人類だけが生命体であるとの錯覚や傲慢さを、「いわしの悲しみ」を通してそっと、しかし見事に指摘しています。

私たち人間は六〇億分の一という生命ではありませんが、お互いに夫々の願いを懐いて生活しています。この会場で「宗教講座という大切なサンガ」に集まっているのは、無意識のうちにも、「夫々の立場でひびき合おうという願い」に促されているからではないでしょうか。これはすばらしいことです。このような願いに気づかずに日常を無意味に過ごすすれば、こんな残念なことではないでしょう。

そのためにも学ぶということは単に知識を詰め込むということではなくて、個々がさらに新たな自分を見いだしていくこと、バラバラな存在だけでも、実は生きるということに関して、生命に関して一つになれるということ。相手の痛みがわかるということ。それはまさしく「ひびきの世界」であり、相手の気持ちがわかる「ブツダの世界」の一面でありましょう。それは自分が努力し自覚していかないとわからない世界です。その「ひびきのわかる世界、ひびき合える世界」こそ、私たちが探し学んでいかなければならない大切な世界の一つなのでありましょう。「本当の自分」が見つか

るのではないでしょうか。

自分自身がまだ気づいていない「本当の自分」が、「本当の自分の生命」が、自分の身体の中に内在しているといわれています。その「本当の自分」を、学生時代という恵まれた二年間、または四年間の学生生活の中で、探してみてください。

或いは一生涯かかるかもしれませんが、「本当の自分」と出遇ってくださいることを念じます。そしてその願いを歩む後姿は、そのままご自分のお子さんたちに必ず伝わります。相手の痛み悲しみを感受できる子どもは、「本当の自分」に出遇った親から生まれるようです。どうぞよいお子さんたちをお迎えになれるように、これからの人生をご自分たちでご準備いただきたいと思えます。長時間のご清聴、どうも有難うございました。

——二〇〇二年五月二三日——